国立国語研究所学術情報リポジトリ

LINEでの日本語母語話者からの誘いを非母語話者はどう断っているか：「再誘い」を誘発する要因とその背景にある意識

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): LINE, refusal to invitation, re-invitation, non-face to face communication, linguistic prescription 作成者: 中井, 好男, 舩橋, 瑞貴, 副田, 恵理子, 向井, 裕樹, NAKAI, Yoshio, FUNAHASHI, Mizuki, SOEDA, Eriko, MUKAI, Yuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001418

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 14: 169–192 (2018)
ISSN: 2186-134X print/2186-1358 online

LINE での日本語母語話者からの誘いを非母語話者はどう断っているか
――「再誘い」を誘発する要因とその背景にある意識――

中井好男[a]　舩橋瑞貴[b]　副田恵理子[c]　向井裕樹[d]

[a] 同志社大学／国立国語研究所 共同研究員
[b] 群馬大学／国立国語研究所 共同研究員
[c] 藤女子大学／国立国語研究所 共同研究員
[d] ブラジリア大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

SNS の一つである LINE が 20 代や 30 代といった若年層のコミュニケーションに広く利用されるようになった。LINE は，スタンプ送信や「既読」表示といった機能があり，送信者の意図・感情の表し方，即時性や双方向性の面において，従来とは異なる非対面のコミュニケーションツールとなっている。この LINE を用いたコミュニケーションについて，2 名の上級レベルの日本語学習者にパイロット調査を行ったところ，日本語母語話者からの誘いを断る際に問題を抱えていたことが分かった。そこで新たに，LINE での日本語母語話者からの誘いに問題を抱えている，または抱えたことがある日本語非母語話者を募り，パイロット調査を依頼した 2 名を含めた合計 10 名の調査協力者を対象に，日本語母語話者からの誘いにまつわる問題点についてインタビューを実施し分析を行った。その結果，「疎」であるが継続すべき関係にある母語話者からの誘いを断る際，協力者は日本語学習の過程で身につけた「丁寧に婉曲的に断る」表現を用いており，その婉曲的な断り方がかえって相手からの誘いを誘発することになってしまうという問題が生じていることが分かった。また，誘いを断る際，（a）相手との関係（親疎関係，継続すべき関係性の有無），（b）当事者の属性，（c）誘いの時期によって，「関心を示しつつ断る」「人間関係維持のために次の機会を期待するメッセージを送る」「相手からの誘いのメッセージを読むが返信をしない」など，断り方が異なっていることも明らかとなった。このように，LINE 上での誘いの断りには，学習を通して断り方に関する言語の規範意識が作られ，それが断るという意志の伝達を妨げる要因になっていること，そして，非対面で短いやりとりを行う LINE の即時的，双方向的な特性から，誘いが事前か当日かという誘いの時期，親疎や利害の有無といった相手との関係性によって断りのストラテジーに違いがあることが明らかになった *。

キーワード：LINE，誘いへの断り，再誘い，非対面コミュニケーション，言語の規範意識

1. はじめに

これまでの日本語教材は，場面シラバスであっても話題シラバスであっても，実際には言語から出発しターゲットとなる語彙や文型をもとに組まれており，そのため言語の役割が過大評価されコミュニケーションの全体像が見えにくくなるといった問題が存在する。これを踏まえ，小林（2017）は，日本語教材は具体的な状況における言語使用に基づいたものであるべきだとし，状況を踏まえた振る舞いが自分の意志を十分に伝えているのかを重視するアプローチを提唱している。本研究は，この「状況から出発する」日本語教材の開発の一環として行われた調査結果である。

* 本研究は国立国語研究所領域指定型共同研究プロジェクト「「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発」（プロジェクトリーダー：小林ミナ）の研究成果の一部である。

教材開発にあたり，現在のコミュニケーションを考える上で見過ごせないのがSNSの存在である。ICT総研（2016）の調査によると，日本国内におけるネット利用人口は9941万人に上り，2014年末現在でその60.6%の6023万人がSNSを利用していることが明らかになっている。そのSNSのうち，利用率が高いのがLINEであり，20代で62.8%，30代で47.0%となっている（総務省2016）。LINEは，とりわけ若年層のコミュニケーションツールとして欠かせない存在となっており，日本国内の日本語学習者においても同様に，SNSのなかでも最も使用率が高いとされている（佐々木2015）。LINEを用いたコミュニケーションでは，音声・ビデオ通話だけではなく，テキストチャットによる通信を行うことができる。特にテキストチャットには，スタンプと呼ばれるイラストの送信機能や相手がメッセージを読んだことを示す「既読」表示機能などがあり，送信者の意図・感情の表し方や同期性の面において，従来の非対面コミュニケーションツールと異なる点をいくつか有している。

このようなLINEの機能は，例えば，話し言葉，書き言葉といった既存の概念では把握できない新たなコミュニケーションスタイルを生み出しており，日本語を第二言語とする人たち（以下，非母語話者）にとっては，これまでの日本語教育で指導されてきたものとは異なるスキルが必要であることは想像に難くない。本研究は，日本語教育は具体的な状況を踏まえた言語使用を扱うべきであるという小林（2017）の指摘に基づき，学習者が置かれている状況とそこで抱える問題を明らかにしようとするものである。後に詳細を論じるが，パイロット調査によって，非母語話者は母語話者からの誘いへの断り方に問題を抱えているという仮説が得られたため，本研究ではこの母語話者からの誘いへの断りに焦点を当てて調査と分析を進めた。

2. 先行研究

誘いへの断りの研究は，日本語と他言語の言語間で，もしくは日本語母語話者と日本語学習者間で比較を行い，両者の意味公式[1]の出現頻度や順序，内容の違いを明らかにしたものが多い（生駒・志村1993，藤森1994，大倉2002，清水2009，王2015など）。また，その断りに見られる言い訳やそれに対する勧誘者の評価・反応を分析したものがある（西村2007，吉田2010）。このような研究の中でも，メールやLINEなどの非対面の断りに着目する研究について以下に概観する。

メールやLINEなどの非対面の断り場面を扱ったものには，吉田（2009，2013），ポンティパー（2013，2015）がある。吉田（2009）は韓国人日本語学習者のメールによる断りにどのようなコミュニケーション機能が含まれるのかを分析し，日本語母語話者と比較した。その結果，韓国人日本語学習者は断る際に直接的な表現を避ける，「言い訳（理由）」として本心を述べない，「共感」を多く用いる，具体的な代案を提示せず一緒に行きたい気持ちを表す「関係維持」を多く使用する傾向があるなど，日本語母語話者よりも全体的に間接的・儀礼的であることが分かった。さらに，吉田（2013）は韓国人日本語学習者にインタビューを行い，韓国人日本語学習者がメールに

[1]「意味公式」とは，断りの分析方法としてBeebeほか（1990）によって提案されたもので，発話行為を遂行するために使われる言語表現をその意味内容・機能によって分類したものである。

おいて日本語母語話者と異なる働きかけ方をする背後に，母語規範に基づいた運用と目標言語規範を意識した運用の両方があることを明らかにしている。

ポンティパー（2013）は携帯メールでの勧誘に対する断り場面を取り上げ，日本語母語話者とタイ語を母語とする日本語学習者を比較している。その結果，両者に共通して「言い訳」「不可」と付随的に「共感」「関係維持」が見られる一方で，日本語母語話者の特徴として「謝罪」「好意的反応」が，タイ語母語話者の日本語学習者の特徴として「情報提供」が見られた。また，ポンティパー（2015）は LINE についても調査を行っており，日本語母語話者とタイ語母語話者の各々の母語による断り場面の謝罪に着目し分析を行っている。この研究では，日本語母語話者は謝罪の言葉に加え，視覚的な顔文字・スタンプなどを用いて残念な気持ちを表している一方，タイ語母語話者は謝罪の言葉は少なく，スタンプのみで自分の気持ちを弁解しようとする様子が見られるとし，スタンプという LINE ならではの特徴を明らかにしている。

これに対して，実際のコミュニケーションを重視し，断りをやりとり場面において明らかにする研究，その中でも，日本語母語話者と非母語話者の実際の接触場面の断りを扱った研究には次のようなものがある。

例えば，武田（1998）は非母語話者の断り行為に見られた逸脱を言語管理モデル[2]に基づいて分析しており，断る行為は同時にいくつもの管理プロセスが必要とされる，非母語話者にとって負担が大きい行為であると指摘している。さらに，断る行為を管理プロセスに加えポライトネス理論（Brown and Levinson 1987）の概念を用いて分析した研究がある（Leadkitlax 2014）。Leadkitlax（2014）は，タイ語母語話者と日本語母語話者の接触場面における誘いに対する断りの談話を分析した。その結果，接触場面では両者ともに母語規範を緩和し，相手の言語規範に沿って会話を進めようとしていることを明らかにしている。具体的には，タイ語母語話者は母語場面では直接的な断りをするが，日本語母語話者の誘いを断る際には「弁明」を間接的な断りとして用いる傾向にあった。また，母語場面とは違う「アルバイトがある」のような「義務的要因による弁明[3]」が多く用いられていたことが分かっている。

では，非母語話者には負担となる断り行為について，それを受けた日本語母語話者はどう捉えているのであろうか。岡田・杉本（2001）は，日本語学習者の断り行動とそれに対する日本人の評価を分析し次のように述べている。上級学習者は摩擦を回避するストラテジーを多用しているのに対し，初級学習者はいきなり断りを表明するなど両者の関係を崩しかねない行動をとっており，学習者の日本語能力によって断り行動に差が見られた。また，それらの行動に対する日本人の評価を分析した結果，表現の丁寧さなど言語的なものではなく，断り行動の段階を経ることで相手に対する評価を高くできる可能性を指摘している。

---

[2] 武田（1998: 18）は「言語管理モデルは，私達が言語を使用する時に行っている管理の段階を示したものである」と述べている。

[3] Leadkitlax（2014）は弁明を「具体的な弁明」と「曖昧な弁明」に分け，「具体的な弁明」はさらに「義務的な弁明」「私的要因による弁明」「物理的要因による弁明」の 3 種類に分けられると述べている。そして，「義務的な弁明」とは「自分には責任がなく，外部にある何らかの義務的な要因により，依頼あるいは誘いを受け入れられないことを言う弁明のタイプ（Leadkitlax 2014: 84）」であるとしている。

以上，接触場面を対象とした先行研究を概観したが，それらの多くはロールプレイをもとにしており，自然会話の中での問題を抽出したものではない。また，LINE 上での接触場面における会話終結部について研究を行った金（2016）が指摘しているように，LINE による接触場面でのコミュニケーションは，先行研究で扱われているような対面式の接触場面とは異なる特徴や問題点が生じると予想される。そこで本研究では，実際の LINE のやりとりを観察し，非対面の接触場面において非母語話者が母語話者からの誘いを断る上でどのような問題に直面しているのかを把握し，それにはどのような要因があるかを明らかにする。

3. 調査方法と調査協力者

本研究では，パイロット調査と本調査の 2 段階の調査を実施した。まず，パイロット調査として，LINE を通じた日本語母語話者とのコミュニケーションで抱えている困難点を探ることを目的としたインタビュー調査を行った。パイロット調査は，執筆者が関わっていた韓国語母語話者の文系学部留学生 A さんと中国語母語話者の文系学部留学生 B さんの 2 名の協力を得て行った（表 1 参照）。調査の結果，A さんと B さんは共通の日本語チューターと関わりがあり，その日本語チューターからの誘いをどのように断ればいいのか分からないという問題を抱えていることが分かった。そこで，母語話者からの LINE 上での誘いと断りに関する問題に絞り，その詳細を探ることを目的として本調査を行った。本調査を進めるにあたっては，執筆者の担当授業の文系学部留学生 34 名と過去の受講者である非母語話者（調査当時は社会人）1 名，計 35 名の非母語話者を対象に，母語話者からの誘いと断りに関する問題を抱えたことがあるという条件で調査協力者（以下，協力者）を募ったところ，9 名の協力者を得ることができた。しかし，そのうちの 1 名は LINE でのやりとりには困難を感じていないことが分かったため，8 名に協力を依頼し，パイロット調査に協力してくれた A さんと B さんを加えた合計 10 名の非母語話者を対象に本調査を行った。協力者は，20 代～ 30 代の韓国語母語話者の文系学部留学生 1 名と中国語母語話者の文系学部留学生 4 名，大学院留学生 4 名，社会人 1 名で，日本語レベルは日本語能力試験 N1（以下，N1）取得済の上級，LINE 使用歴は 1 年～ 4 年である。以下に，協力者の属性を表 1 として示す。本調査のインタビューは各協力者に対し 1 回 1 時間程度のもので，インタビューでは協力者に日本語母語話者とのやりとりをスマートフォンの画面上で振り返ってもらい，彼らが持っている問題意識を聞き取り手書きで記録した。また，問題だと認識している LINE でのやりとりがあれば，同様に，その詳細を聞き取るとともに実際に行われたやりとりを手書きで記録した。

表 1　調査協力者の属性

協力者	母語	性別	身分	日本語レベル／日本語学習歴	滞日歴	LINE 使用歴
A	韓国語	男性	学部留学生	N1 ／ 3 年（韓国の高校で 2 年，日本の大学で 1 年）	1 年	1 年
B	中国語	女性	学部留学生	N1 ／ 5 年（日本の日本語学校 2 校で計 4 年，日本の大学で 1 年）	5 年	4 年
C	中国語	女性	学部留学生	N1 ／ 4 年（日本の日本語学校で 2 年，日本の大学で 2 年）	4 年	4 年
D	中国語	女性	学部留学生	N1 ／ 4 年（日本の日本語学校で 2 年，日本の大学で 2 年）	4 年	4 年
E	中国語	女性	学部留学生	N1 ／ 3 年（日本の日本語学校で 2 年，日本の大学で 1 年）	3 年	3 年
F	中国語	女性	大学院留学生	N1 ／ 5 年半（中国の大学で 4 年，日本の大学で 1 年半）	3 年半	1 年
G	中国語	女性	大学院留学生	N1 ／ 3 年（中国の大学で 3 年）	2 年	2 年
H	中国語	女性	大学院留学生	N1 ／ 4 年（中国の大学で 4 年）	4 年半	3 年
I	中国語	女性	大学院留学生	N1 ／ 4 年（中国の大学で 4 年）	2 年半	2 年
J	中国語	男性	社会人	N1 ／ 4 年（日本の日本語学校で 2 年，日本の大学で 2 年）	14 年	4 年

4. 分析手法と枠組み

本研究では先行研究で指摘されているようにコミュニケーションの状況性を重視し，実際に非母語話者が抱える問題を探索，その問題を非母語話者の意識とともに明らかにすることを目指す。分析にはケース・スタディの手法を援用し，非母語話者へのインタビューデータと LINE でのやりとりに関するデータを分析する。ケース・スタディは，「ある一つの事例や現象や社会的単位の集約的，全体論的記述と分析」（メリアム 2004: 38）であり，探索，記述，説明を目的とした研究に適しているとされている（イン 2011）。また，ケース・スタディは具体的で文脈に根ざしており，単一のケースではなく様々な複数のケースを分析することによって，取り上げた複数のケース間での共通した特性を抽出できるだけではなく，読者の解釈によってさらに発展させられる可能性を秘めている（メリアム 2004）。本研究では，母語話者からの誘いへの断りに関して何らかの問題を抱えている非母語話者の具体的な個別の文脈や現象を一つのケースとして記述し，それらのケースを複数分析することで，何らかの共通する特性を見出すことを目指す。

5. 結果

本調査の結果，非母語話者が誘いを断るのに困難を感じているのは，「疎」の関係にある母語話者からの誘いを断る場合であることが分かった。そこで，本研究では，協力者にとって「疎」の関係にある母語話者からの誘いを断る場面を取り上げる。ここでいう「疎」の関係とは，あくまでも協力者本人の判断によるものであり，母語話者の認識には注目しない。

さらに，「疎」の関係の中でも，留学生イベントで知り合った顔見知り程度の関係なのか，チュー

ターや取引先相手など，何らかの目的のために関係を継続しなければならないかどうかで，断り方に違いが見られた。継続すべき関係にある母語話者とは，日本語チューターや国際交流支援室のスタッフ，企業の取引先の日本人である。協力者はこれらの母語話者とは業務以外のことで連絡を取ることはなく,「親しくない」「丁寧な配慮が必要」などと感じていると述べている。さらに，これらの人たちとの間で作られる人間関係は協力者にとっては自ら構築したものというより大学や企業といった組織によって与えられた関係で，無視することのできない継続する必要がある関係だと述べている。これに対して，継続する必要のない関係にある母語話者というのは，交流イベントのような一回性のイベントや人を介して知り合い，連絡先も交換したが，その後，全く連絡を取ることがない人たちのことである。よって，5.1 では，継続すべき「疎」の関係性にある母語話者からの誘いの断りを，5.2 では，継続する必要のない「疎」の関係性にある母語話者からの誘いの断りを扱い，実際のやりとりを調査者の記録をもとに再現したものやインタビューでの回答を提示しながら，非母語話者が用いた断り方やその際に生じたコミュニケーション上の問題点について記述していく。やりとりの再現を用いるのは，協力者とその相手とのプライバシーなどに配慮したためである。インタビューデータのカッコ内の言葉は執筆者が補足した部分である。

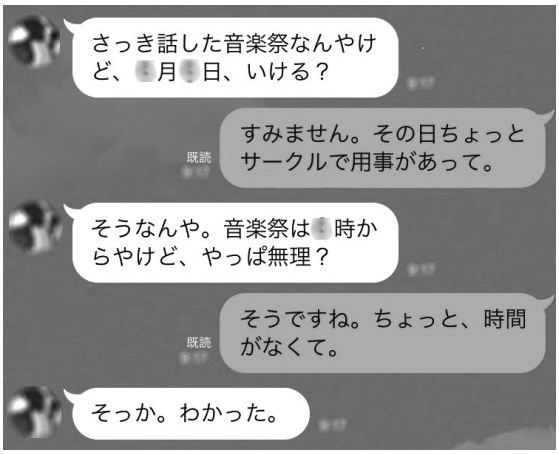
5.1 継続すべき「疎」の関係性にある母語話者からの誘いの断り

前述のように，今回の調査で見られた継続すべき関係で，なおかつ「疎」の関係にある母語話者は，日本語チューター，国際交流業務を担う部署のスタッフ，取引先相手であった。協力者は，これらの「疎」ではあるが継続すべき関係にある人たちから誘われた場面で問題を感じていた。以下，5.1.1 ～ 5.1.3 においてケースごとに，協力者がどのような誘いを受け，どこで困難を感じていたのかについて記述していく。また, 5.1.4 では, 同関係性においても問題が生じなかったケースを取り上げることで，断りにおける問題の全体像をより明確にしたい。

5.1.1 日本語チューターからの誘いのケース

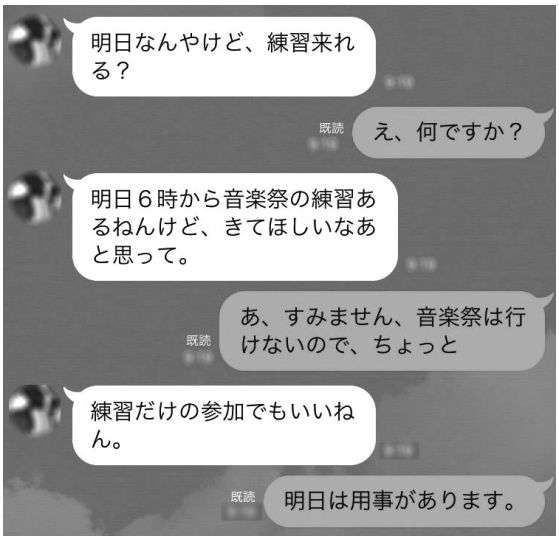
日本語チューターからの誘いについて言及したのは，大学の学部で学ぶ韓国人留学生の A さんである。日本語チューターとは大学の国際交流業務を担う部署を介して知り合った。インタビュー当時, A さんは日本語チューターと日本語支援などのやりとりをして半年が経過していた。A さんがこの日本語チューターとのやりとりで悩まされるようになったのは，留学生音楽祭への誘いが始まってからである。最初に誘いがあったのは廊下ですれ違ったときで，A さんはサークルで時間が取れそうにないため，その場で直接断っていた。しかし，以後何度も LINE で誘われるようになった。まず，LINE で送られてきた最初の誘いの場面である。

(1)　日本語チューターからの誘い 1



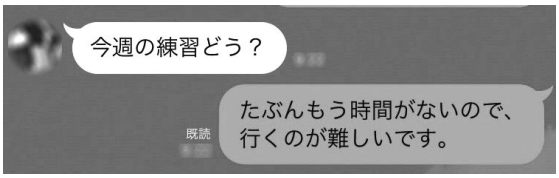
「音楽祭」というのは，3 か月後に開かれる留学生音楽祭のことであり，その開催まで，月に 2 度ほど出演予定者が集まり練習を行っていた。A さんは音楽祭には出席できない旨を直接対面にて伝えてはいたが，その直後に送られてきたのが（1）である。さらに，対面した 2 日後には，日本語チューターはこの練習への参加だけでもいいということで（2）のような誘いを送信してきている。

(2)　日本語チューターからの誘い 2

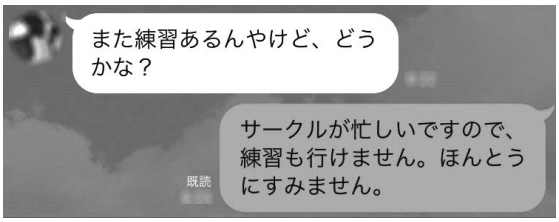


この後，さらに（3）～（5）のような誘いが 1 週間おきに 3 回来ており，A さんは連絡が来るたびに断っていた。実際に音楽祭の日はサークルのイベントと重なっていた上，練習だけに参加しても意味がないとも思っていたからである。

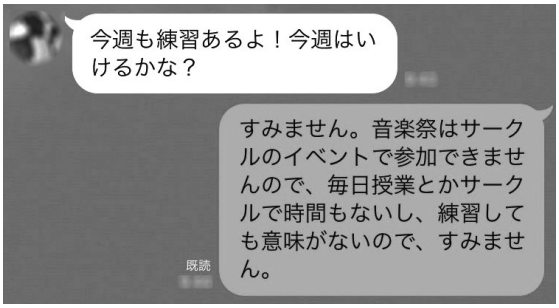
(3)　日本語チューターからの誘い 3



(4)　日本語チューターからの誘い 4



(5)　日本語チューターからの誘い 5



(5) のやりとり以降, 連絡が途絶えた状態となっている。A さんはこの一連のやりとりについて, (6) のように話している。

(6)　（日本語を話すときは）やっぱり今は真面目な感じです。ほんとに気持ち悪いです，これ。音楽祭もちょっと優しく断ったんですよ。ショックしないように。関心がないってはっきり言えるのに。LINE も（チューターとの）関係が悪くなってもいいから，強く言いたいけど真面目にする。韓国語だったらはっきり行きたくないって言えるんですけど，日本語だったらなんか失礼というか，はっきり断ったらショック受けるんですよね。そう思うから, ちょっと無理ですみたいにして。なんで日本語ではっきり言えないかな。はっきり言ってもいいんですか。

日本語を話すときは「真面目な感じ」になり，断り方も相手を傷つけないように「優しく断った」と言っている。音楽祭への誘いについては興味を持っていないとはっきりと断ることができ，それによって日本語チューターとの関係が悪くなってもいいから言いたいが，あえてそれをしない理由について（7）のように述べている。

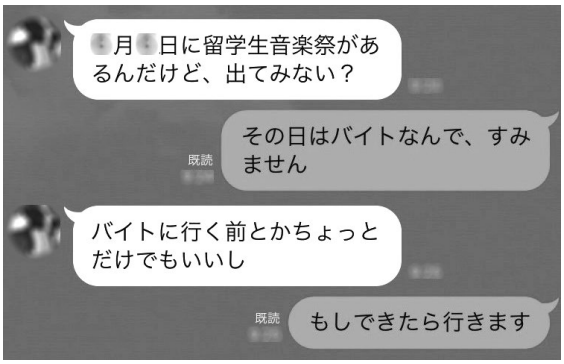
(7)　事務所の先生の紹介ですよね。なんか失礼にしたら○○さん（「事務所の先生」の名前）に叱られるかもしれないし。成績悪くならないですか。あとで困るんですよね。だから，嫌いですがショックしないように優しくしてチューターを続けなければならないんですよね。

A さんは，日本語チューターは大学側から紹介してもらった人であるため，関係が悪くなることはよくないと考えている。そのため，はっきりと断らず，相手に配慮した断り方を A さんなりにしようと努力しているということである。

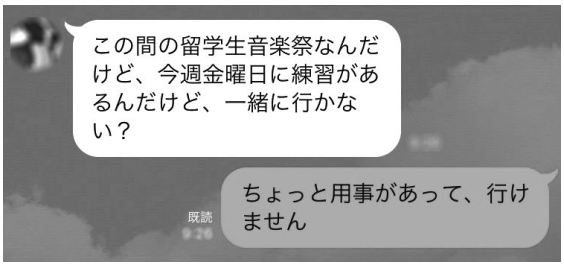
この日本語チューターからの誘いは，A さんと同じ学部に所属する学部留学生 B さんも悩ませていた。次にこの B さんのケースを記述する。

B さんには別の日本語チューターがついていた。しかし，B さんは国際交流業務を担う部署でチューターを紹介してもらうときに A さんの日本語チューターとも会っており，そのときに LINE の ID も交換していた。B さんはこの日本語チューターとは連絡を取っていたわけでもなく，学校で会えば会釈をするぐらいの関係であったが，日本語チューターは学校関係者の 1 人であるため，単なる知り合いとは異なる存在として捉えていた[4]。このような関係にある日本語チューターから，(8) のような音楽祭に関する誘いが LINE で来るようになった。

(8)　日本語チューターからの誘い 1



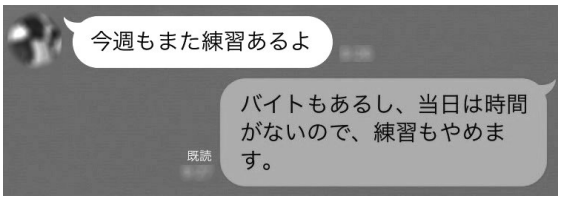
(9)　日本語チューターからの誘い 2



[4] B さんを悩ませる母語話者は，実際には B さんの日本語チューターではないが，B さんの意識としては，自分の日本語チューターと同類であると認識される存在であったため，ここに含める。

練習が行われる週には必ずその誘いがあり，B さんは（9）のように断ってきたが誘いがやまないため一度だけ仕方なく練習に参加した。しかし，音楽祭当日はどうしても行けないのに練習に参加する意味がないと考え，更なる LINE での練習への誘いを（10）のように断った。

（10）　日本語チューターからの誘い 3



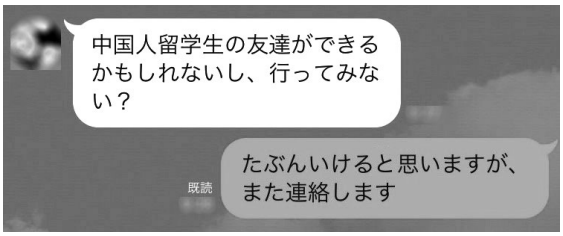
（10）の断り以降，誘いがなくなった。B さんは当初，音楽祭に参加できないことは伝えていなかったが，その理由についてインタビューで（11）のように述べている。

（11）　はっきり断ったら，ちょっと強いというかショックでしょ。全然行きたくないのに，なんか興味あるけど時間がないから残念みたいに断って。中国だったら, 興味ない, 行かないってはっきり言っていいんだけど，気にしないし。だからはっきり言うのはできるけど日本人と断るときはなんか平和にしたほうがいいって習いましたよね。今まで日本人の友達を見ても，いいねえ，あ，でもね，みたいにするから，やっぱりはっきりはできない。（中略）はっきり断るのはできますよ。できないのはやっぱり（相手が）日本人だからかもしれない。だから行きたくなくて断るときは，すぐに断るじゃなくて，やっぱり理由を探してから，断ります。「どこですか」「ちょっと遠いですね」とか。難しいけどこれも日本にいるから日本の文化だから勉強ですよ。

A さんと B さんは母語の場合，誘いを断る際は興味がないことや行きたくないことを伝えるため，日本語でも同様の断り方をすることができるが，相手が日本人の場合には授業で学んだことや日本人とのやりとりの経験からはっきりと気持ちを伝えることで断るのはよくないと考えているようである。

日本語チューターからの誘いに関しては，大学院留学生 F さんも断る際に困難を感じていたことを述べている。インタビュー当時, F さんには 1 年近くやりとりをしている日本語チューターがついていた。プライベートでの交流が特にあるわけではなく，レポート作成時などの日本語支援や留学生関連のイベントなどがあるときにのみ連絡を取る程度であった。インタビューでは留学生に関するイベントのお知らせが日本語チューターから LINE で届き，（12）のように断ったと述べている。

（12）　日本語チューターからの誘い 1

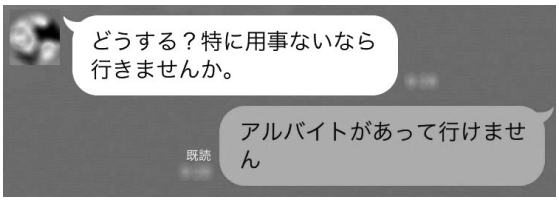


F さんは LINE で（12）のように断ったが，その後日本語支援を受けるために何度か会う機会があり，対面で直接再誘いを受けたということであった。この誘いに対して F さんは会うたびに「また連絡します」という言い方で断っている。このような断り方をした理由について（13）のように述べている。

（13）　また連絡しますと言ったら，私から連絡するまで待つと思います。それに連絡がないなら，もう来ないということですねと考えますが，どうでしょうか。行きませんと言ったら言葉が強いなので，この言い方を考えましたけど，チューターさんにはまだ会いますから。

F さんとしては「私から連絡する」という言い方で婉曲的に断ってきたつもりであった。しかし，再度 LINE で（14）のような誘いのメッセージが届いた。

（14）　日本語チューターからの誘い 2



F さんは再三の誘いの後に更に LINE で誘いが来たため，(14) のように断っているが，この (14) に至る一連の誘いについて，（15）のように述べている。

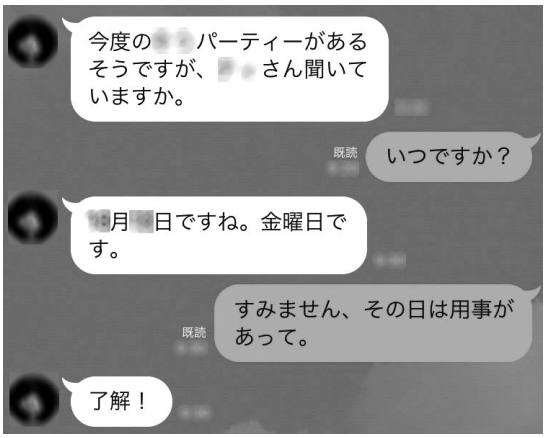
（15）　また LINE で誘われたんですよ。LINE ではっきり断りました。何回も嫌でしょう。何回も断るのほうがいやだから。その前に会ったときに何回ももし行けたら連絡しますと言いましたが。

F さんは何回も断ってきたつもりだったが再誘いが続いたため，LINE での誘いに対しアルバイトがあるという理由を述べることで「はっきり」断ったと考えていることが分かる。はっきり理由を述べて断る前は「また連絡します」という言い方で断っているが，その「婉曲的な」断り方が再誘いを招いていたと考えることができる。

さらに，大学院留学生の G さんも日本語チューターからのパーティーへの誘いが続くことに悩んでいたと述べている。G さんが連絡を取っている日本語チューターもプライベートでは交

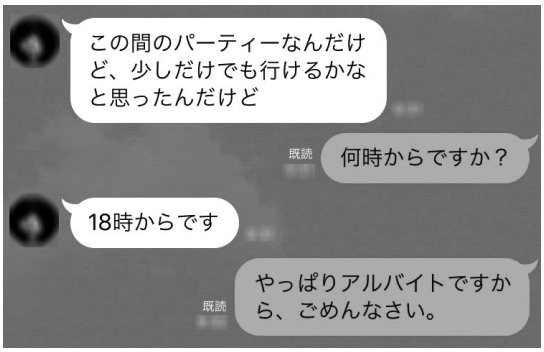
流がなく，日本語支援や留学生関連のイベントの告知などで連絡を取っているだけであった。その日本語チューターから留学生パーティーの誘いが来た。その時の LINE でのやりとりが（16）である。

（16）　日本語チューターからの誘い 1



上記のようにいったん誘いを断ったような形になっている。しかし，10 日後に再度（17）のような連絡がきた。

（17）　日本語チューターからの誘い 2



インタビューにおいて，G さんは 2 度目の誘いを「しつこい」と感じていると述べていたが，「しつこい」と感じている一方で，「何時からですか」と開始時間を聞いてすぐに断ることはしていない。

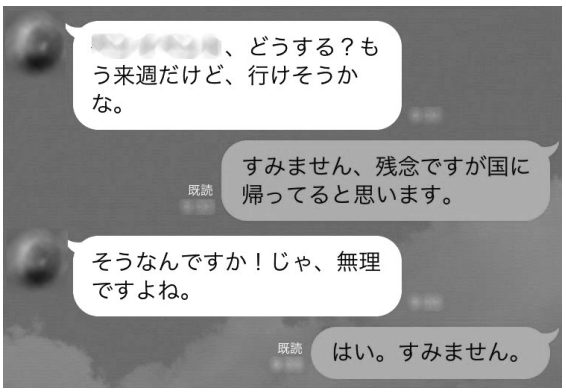
（18）　断る理由を探していたと思います。なんかまっすぐ断ったら，冷たいですけど，時間を聞いてから断ったら失礼じゃないかなと思います。しつこいですけど，せっかく誘ってくれますので。

G さんは断る理由を探すと同時に婉曲的に断ることで失礼にならないだろうと考えていたことが分かる。

5.1.2 国際交流支援室のスタッフからの誘いのケース

次に，大学院留学生 H さんが語った国際交流支援室のスタッフからの誘いについてである。ここでいう国際交流支援室とは留学生に関する業務を行っている部署で，その部署のスタッフとは日常的に関わることが多く，H さんはあまり問題を起こしたくないと考えている。そのため，れっきとした理由があって行けないと断るのであればよいが，行きたくないというだけの場合にどう断ればいいのか非常に悩んだということであった。そして，悩んだ末に実際に H さんが国際交流支援室のスタッフに送った LINE のメッセージが（19）である。

（19）　国際交流支援室のスタッフからの誘い 1



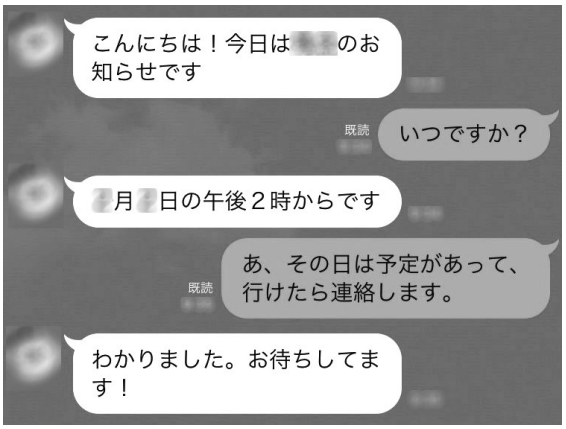
これについて H さんは（20）のように述べている。まず，H さんは，国際交流支援室のスタッフから交流イベントへの誘いを何度も受け，その対応に困っていた。

（20）　問題にならないようにきちんと説明して断ります。やっぱりよく会う人でお世話になってる人だから。行きたくないわけではなくて行けないなら，いいと思います。行きたくないだけのときはどうするかな，困るけど。支援室に行く用事があったときに，行けたら行きますけどって言ったんですけど，結局最後にまた LINE が来たから，嘘つきました。よくないんですけど。仕方がないなという理由にして。興味あるのにみたいな。（中略）ちょっとごめんなさいみたいなのがいいって（母国で受けた日本語の授業で）習ったことがあるんですけど，ちょっとめんどくさい感じがあるんですよね。

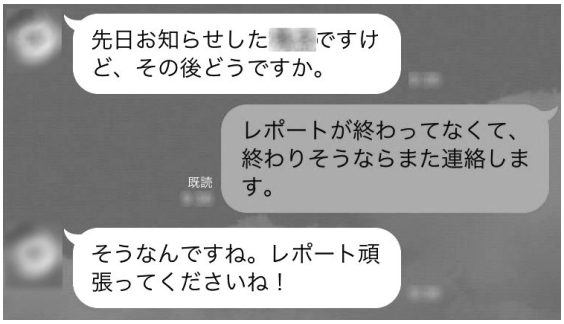
世話になっているなど，相手との関係を壊したくない場合は，不可抗力的な印象が強い理由を持ち出して断ることで，誘われたことへの好意を示すことになり相手との関係に傷をつけないと考えていることが分かる。

これと同じような断り方をしているのが大学院留学生の I さんである。I さんも国際交流支援室のスタッフから交流イベントへの誘いを LINE を通じて受けた。（21）がその際のやりとりである。

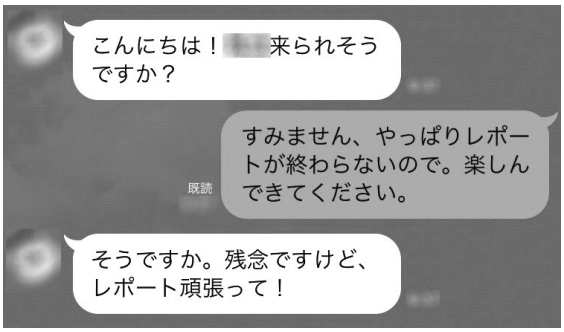
（21）　国際交流支援室のスタッフからの誘い 1



（22）　国際交流支援室のスタッフからの誘い 2



（23）　国際交流支援室のスタッフからの誘い 3



Ｉさんはインタビューにおいて,「いつも「いつ」なら「その曜日は用事がある」,「何時」なら「その時間はバイトがある」って，一回相手に状況について聞いてから断るのが多くて，理由も見つけるし，相手が誘って気分悪くならないようにして」いると言っており，誘いの内容について質問をすることで，断る理由を探すこともできる上，単に断るだけではなく，興味がある様子を見せることで相手への配慮につながると考えていることが分かる。

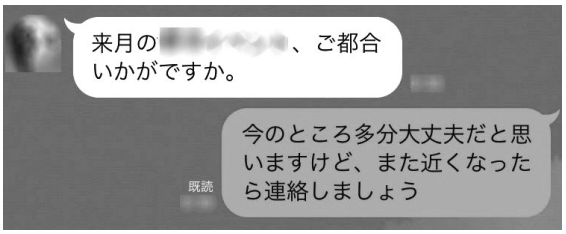
5.1.3 取引先の人からの誘いのケース

5.1.1，5.1.2 では，「疎」の関係であっても継続する必要がある母語話者からの誘いに対する非母語話者の断りにおける問題点とその意識について記述した。これらの記述から，非母語話者は継続すべきであるという関係性から母語話者の誘いを断る際に相手への配慮をしている様子が窺えた。こういった相手との関係を踏まえた配慮については社会人の J さんもインタビューで以下のように触れている。

(24)　日本に限らず円満に断るのも社会経験。しつこく誘ってくる人がいるんだけど，必ずどこかで会う人やからはっきりは断らない。実際，（イベントに誘われた時）「え，何曜日ですか」，「仕事があって無理」，それでも当日 LINE が来たら「今日は残業で無理ですわ」って言った。日本人やったらはっきり断ったら，傷つくって。日本語の先生，そう教えてるんちゃうん。中国でもそうだけど，そう，だから。でも，（立場が）社会人か学生かによって（対応方法が）違うかも。（中略）（自分が）学生やったらめんどくさいし無視してるけど今は社会人やから無視できない。仕事関係じゃなかったら無視することもあるけど，でも，やっぱり責任というか社会人やし，やっぱりできない。（中略）面白くなさそうやからいやとか，行きたくないとか，しんどいからいやとか，はっきり言うのはほんまに仲のいい友だちぐらいかな。

（25）は実際に J さんが行っていた取引先の人からの誘いへの断りである。（24）の語りに見られるが，もし自身が学生だったら無視していたであろうが，取引関係で知り合った以上，将来取引などで関わる可能性を考えると，すぐに断るのではなく，曜日を尋ねたりすることでいったん保留し，理由を探しつつ「円満に」断ることが必要だと考えている。それに加えて，J さんもはっきりと断る，つまり興味がない，行きたくないという自身の気持ちを直接伝えて断ることは「親」の関係にある友人以外ではできないとも考えている。

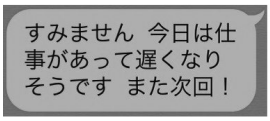
(25)　取引先の人からの誘い



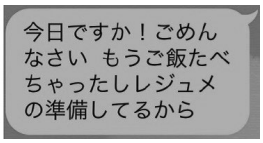
5.1.4 当日の誘いのケース

5.1.1 ～ 5.1.3 と同様に，継続すべき関係性にある「疎」の母語話者からの誘いであっても，その誘いが当日のものである場合は，以下に示すように明確な理由とともに断っており，再誘いには至っていないことも分かった。

（26）　明確な理由を伴う断りの例



社会人 J さん



大学院留学生 G さん

当日の誘いであれば断る理由を明確に記すことについては，J さんは（27），G さんは（28）のように述べており，はっきりと断る理由を述べることに何ら抵抗を感じていないことが窺える。

（27）　急に誘われたし，別に断っても気にしなくてもいいし。（J さん）

（28）　その日だったら，ちゃんと言わなかったら迷惑だから。（G さん）

5.2 継続する必要のない「疎」の関係性にある母語話者からの誘いの断り

5.1 では，「疎」の関係であっても継続する必要がある母語話者からの誘い，その誘いへの断りにおいて協力者が困難を感じていることを見た。一方，本調査のインタビューでは，イベントや友人を介して知り合った母語話者のように「疎」の関係であるものの，5.1 とは異なり，その関係性を維持していく必要がない母語話者からの誘いを断ることについては困難を感じてはいないことも分かった。

継続する必要のない「疎」の関係の母語話者というのは，上述のように交流イベントや友人，仕事の関係で知り合ったが直接業務には関係のない人など，イベントや人を通じて知り合い連絡先も交換したが，全く連絡を取ることがない人たちのことである。協力者の中にはこういった人たちからイベントなどのお知らせが届くことがあるが，そういった誘いに対しては，既読スルー[5]，つまり，誘いに関するメッセージを読んだ後返信をしないでそのまま放置するという対応を取っていることが明らかになった。例えば，F さんは中国人コミュニティーを通して知り合った母語話者からの誘いを，G さんは中国人留学生会を通して知り合った母語話者からの留学生向けイベントへの誘いを，H さんは交流会で知り合った他学部所属の母語話者から送られてくる交流イベントへの誘いを既読スルーしている。それぞれが行った断りについて，インタビューでは以下のように述べている。

（29）　特にあんまり知らない人だから，そのまま返事しないですよ。（F さん）

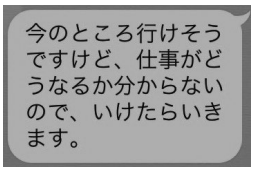
（30）　知人の場合ありましたけど，ほんとに会いたくなかったので，無視しました。電話も来たけど，無視しました。（G さん）

[5] LINE では，送信したメッセージが相手に読まれた場合，メッセージに「既読」というマークが付く。既読スルーとは，メッセージが既に読まれていて「既読」マークが付いているにもかかわらず，返信がなく放置されている状態を指す。

(31)　よく知らないし，いろんな人に誘ってるかもしれないじゃないですか。だから返事なくてもいいかなって。(H さん)

このように，維持する必要のない「疎」の関係の母語話者からの誘いについては，10 名のうち 9 名が既読スルーをしているという回答をしており，誘いを既読スルーした場合は，再誘いを受けていない。しかし，社会人である J さんのみが，(24) において，「社会人やから無視できない。仕事関係じゃなかったら無視する（既読スルーする）こともあるけど，でも，やっぱり責任というか社会人やし，やっぱりできない。」とも述べており，断る際に (32) のような文を返信している。

(32)　継続する必要のない「疎」の関係の母語話者からの誘いに対する社会人 J さんの断り



この社会人 J さんの返答は，5.1.3 で見た再誘いが生じた断り方と同種のものであるが，社会人 J さんの場合も再誘いには至っていない。

6. 考察

5 節より，非母語話者が母語話者からの誘いを断る場面で抱えている問題は再誘いであり，断り方に困難を感じていることが分かった。本節では，日本語教育への示唆を得ることを目的に考察を行う。6.1 では，5 節の結果を適宜振り返りながら，非母語話者がどのようにして母語話者からの誘いを断っているのかについて考察する。6.2 では，非母語話者が問題と考えている再誘いを誘発する原因を探る。

6.1 LINE での誘いへの断り

本研究より，非母語話者が LINE での誘いを断る際，(a) 相手との関係（親疎関係，継続すべき関係性の有無），(b) 当事者の属性，(c) 誘いの時期によって，人間関係維持のために判断を保留する表現を用いて即座に断ることを避ける，明確な理由を述べ即座に断る，相手からの誘いのメッセージを読むが返信をしないなど，状況に合わせて断りのストラテジーを使用していることが分かった。そして，継続すべき「疎」の関係の相手から誘われ，当日の誘いではなく，実施までにしばらく時間があるようなイベントなどに誘われた場合に，明確な断りの意志表示をすることをせず，それが再誘いを誘発し，問題となっていることが明らかとなった。

一方で，(a) 継続する必要のない「疎」の関係性にある母語話者から誘われた場合，(b) 社会人の場合，(c) 当日の誘いのケースでは再誘いの問題は見られなかった。これは，(a) については 5.2 で見たように，関係を継続する必要のない「疎」の関係性にある母語話者からの誘いには既読スルーという対応を取っており，その場合には再誘いが起きなかった。この既読スルーは，関係を

継続する必要もなく「疎」であるということから選択された反応であると考えられる。

また，(b) の社会人に関しては，仕事関係の相手など利害関係のある（継続すべき関係にある）母語話者からの誘いであれば，理由を探しつつ「円満に」断る方法を取っており，段階を経て断ることや再誘いに対応することは仕方がないと捉えているようである。また，継続する必要のない相手に対しては，社会人 J が学生という身分ではなく責任のある「社会人やから無視できない」とも述べているように，既読スルーではなく返信をしているが，再誘いには至っていない。これは，利害関係のない 2 者の関係性が影響して積極的な誘いが起こらなかったのではないかと推測される。つまり，本研究協力者の社会人の場合には，どちらの場合でも誘いへの断りのやりとりにおいて問題は生じなかったということである。

(c) の当日の誘いについては，5.1.4 で見たように，時間的な制約があること，つまり，「時間」という自分の意志以外の不可抗力的要素に断る原因を見出すことができることに加え，断る際に明確に理由が示されていたことで再誘いには至らず，問題が起きなかったようである。

6.2 再誘いを誘発する原因

非母語話者が問題だと考えている再誘いを誘発する原因は，非母語話者の婉曲的な断り方と彼らが媒体として用いている LINE の特性にあると考えられる。そこで次にこの 2 点について論じる。

6.2.1 婉曲的な断り

協力者全員が「はっきりと断るのはよくないと考えて返信している」という主旨のコメントを述べており，継続すべき関係性にある「疎」の母語話者からの誘いに対しては，失礼にならないように行きたくないという気持ちや断りの明確な意志表示を避け，即座に断らないほうがよいという意識のもと，婉曲的な断りを行っていた。具体的には，誘いに対して即座に断ることを避け，断る理由をアルバイトやレポート提出などの自分の努力如何によっては変更可能な，自分の意志以外の要素に見出し，それを言い訳にする断りである。このような婉曲的な断りが，特に LINE では，非母語話者が困難を感じている再誘いにつながったと推測される。

この「人間関係維持のためには，婉曲的に断る」というストラテジーについては，協力者が「日本人と断るときはなんか平和にしたほうがいいって習いました（学部留学生 B さん）」[6]「ちょっとごめんなさいみたいのなのがいいって習ったことがあるんですけど（大学院留学生 H さん）」「日本人やったらはっきり断ったら，傷つくって。日本語の先生，そう教えてるんちゃうん。（社会人 J さん）」とコメントしている点から見ても，日本語学習の過程で身につけたものだと考え

[6] B さんのコメント（11）「今まで日本人の友達を見ても，いいねえ，あ，でもね，みたいにするから，やっぱりはっきりはできない」に見られるように，非母語話者は母語話者の言語使用を通しても，婉曲的に断るストラテジーを身につけている可能性があると考えられる。しかしここで，非母語話者が「はっきり」しない要素として捉えていると思われる「いいねえ」は，続く「あ，でもね」から推測されるように，断りの前置き（断ることを前提とした緩衝表現）とも考えられる。つまりここからは，母語話者の意志は断ることが前提であり，はっきりしているのに対し，非母語話者はそれを「はっきり」しないと受け取っている可能性があり，解釈にずれが生じているという別の問題が示唆される。この点に関しては，本研究で明らかにすることはできない。今後の課題としたい。

られる。実際，日本語のテキストでは，会話場面において（33）（34）のように「○○はちょっと……」という文末をはっきりと言わず間接的に断りを伝える表現が，多くのテキストで紹介されており，（35）のようにそれが相手に配慮した表現として説明されている。また，いくつかの断り表現が提示されている中上級の会話テキストにおいても，（36）～（38）のようにはっきりと断ることについては否定的であり，理由も必要はない，あるいは，詳細まで述べる必要はないとされている。

（33）（前略）
ミラー：あのう，木村さん，クラッシックのコンサート，いっしょにいかがですか。
木　村：いいですね。いつですか。
ミラー：来週の 金曜日の 晩です。
木　村：金曜日ですか。
　　金曜日の 晩は ちょっと……。
（後略）　（スリーエーネットワーク（編）2000: 75，会話からの引用）

（34）アレン：中田さん，あした，テニスをしますが，中田さんもどうですか↑
中　田：あしたはちょっと……。すみません。
アレン：そうですか。じゃあ，また今度。
中　田：ええ，また今度。　（小池ほか 2007: 58，練習の会話例からの引用）

（35）「あしたはちょっと……」（N はちょっと……）
誘い，招待を断るときに使います。「いいえ，行きません」のように直接的な表現は使いません。これは,「あしたはちょっと忙しいです」のような表現の後半を省略した表現です。N は話し手にとって都合の悪いものを示します。「ちょっと」は，少しという意味で，都合が悪いことの程度を弱め断定的な言い方を避ける働きをします。相手の気持ちを配慮した言い方です。　（小池ほか 2007: 62，NOTES（表現の説明）からの引用）

（36）誘いの上手な断り方
　相手の好意的な誘いを断るのは難しいものです。特に，先生や目上の人からの誘いを断るときは，相手に失礼にならないように，丁寧に断りましょう。そのときの話し方としては，あまりはきはきと理由を述べるのではなく，言いにくそうに言いましょう。「日曜日はちょっと…。」などと，文の最後まで言わずに，途中で終わらせる言い方もよく使われます。そのほうが，断るのが残念で，相手に申し訳ないという気持ちが伝わります。
　このように日本人ははっきり断る言い方をあまりしない人が多いようです。そのため，外国人が日本人を誘ったとき，断られているのかどうか分からないという話も，時々聞きます。「～はちょっと…。」とか「それが…。」「難しいかもしれない」などという表現は，断り表現だと考えるといいでしょう。　（中居ほか 2005: 37，コラムからの引用）

(37)　【はっきり断る】は失礼に聞こえるので，目上の相手には使いません。対等・目下で親しい相手に対しても，以下の例のように，必ずほかのストラテジーと組み合わせて使うようにしましょう。（後略）

例：

なおみ…今度の土曜日，映画に行かない？

アベナ…あー，土曜日はだめなんだ。　　はっきり断る

バイトが入っていて。　　理由を言う

ごめんね。　　謝る

（清水 2013: 66，誘いを断るときのストラテジーの説明からの引用）

(38)　会話のヒント：断るとき，くわしい理由を説明しなくてもいいの？

（前略）日本語では誘いを断るときに，「予定がある」「用事がある」「都合が悪い」などと言い，具体的な内容まで説明することはあまりありません。誘った人も，それ以上説明を求めないことが多いのです。　（清水 2013: 69，会話のヒント（コラム）からの引用）

書く技能に関するテキストにおいても同様に，(39)（40）のようにはっきりと行けないことを表明するのではなく，理由を説明したり，謝ることで断りを表明したほうがいいとしている。また（40）では，目上の人や親しくない人からの誘いを断る際には，理由によっては詳細を説明すると失礼になる場合があるため,「用事がある」「都合が悪い」などの表現を使うべきだとしている。

(39)　相手からの誘いやお願いを断るときは,「行きません」「お断りします」などと書くのは失礼です。理由を説明して「できなくて，すみません」という気持ちを伝えます。（後略）

（簗ほか 2005: 64，解説からの引用）

(40)　断る時，はっきりと断る表現を使うことはあまりありません。誘ってくれた気持ちを考えて，謝ることで断ることを伝えることが多いです。ですから，断る時は謝る表現を使うといいでしょう。

また，断る時の事情説明は，親しい人にはきちんとしたほうがいいです。しかし，目上の人やあまり親しくない人に誘われた時,「友達とカラオケに行く」「彼・彼女と旅行に行く」などの理由で断らなければならない場合には, はっきり事情を説明せず,「用事がある」「都合が悪い」などの表現を使うことがあります。どうしても断らなければならない理由ではない時，はっきり理由を言うと失礼になるかもしれないからです。（後略）

（由井ほか 2012: 46，コラムからの引用）

このように，日本語テキストにおいては,「はっきりと断るべきではない」「理由も詳細まで述べる必要はない」という点が強調される傾向にある。

インタビューにおいて韓国語母語話者の学部留学生 A さんと中国語母語話者の学部留学生 B さん，社会人 J さんが母語なら興味がない，行きたくないという気持ちを直接伝えることで断る

と，母語の言語規範について触れている箇所があるが，本研究において日本語で断る際にはこの母語規範は用いず，全ての協力者が即座に断ることを避け，断る理由を自分以外の要素に見出していくという方法を取っていた。これは，母語規範とは異なる日本語のテキスト上に示された日本語の言語規範に従った言語運用を行っていたと言える。しかし，日本語教育が提示するこういった断り方が適切かどうかは誘いの時期や相手との関係にも左右されるものであり，今回の調査のように継続すべき「疎」の関係の相手から事前にイベントに誘われていたような場合には，LINE 上での婉曲的な断りは母語話者からの再誘いを誘発し問題を生じさせているということが明らかとなった。

6.2.2 LINE の特性

再誘いを誘発するもう一つの原因は，LINE の特性にあると考えられる。LINE は，非対面で，文字・スタンプや絵文字による短いやりとりが頻繁に行われるコミュニケーションツールである。非対面で文字言語を主とするやりとりであるという点においては，例えば E メールとの共通性を，短いやりとりが頻繁に行われるという点においては，例えば対面会話との共通性を有するコミュニケーションツールと言える。このような LINE によるコミュニケーションの特性を大まかに捉えるならば，対面会話に類する双方向性を備えているが故に，一回の産出において E メールのような文字言語による完結性は求められず，コミュニケーションが相互構築されるものである。その一方で，対面会話とは異なり非対面コミュニケーションであるため，音声的な特徴，視線，ジェスチャーなどの非言語行動が伴わない。このような LINE の特性が複合的に影響し，本研究のデータに見られた断り方では，断りの意志が伝わりにくく，再誘いを誘発したと考えられる。

7. まとめと今後の課題

以上，母語話者からの LINE 上での誘いへの断りに関して非母語話者が抱えている問題とその意識について分析，考察を行った。非母語話者は，「疎」であっても維持すべき関係にある母語話者からの，時間的に余裕のある誘いの場合，それを断っても再誘いが起こってしまうという現象に問題を感じていることが分かった。関係性を壊さないようにという意図のもとに行った非母語話者の丁寧かつ婉曲的な断りでは，断っていることが適切に伝わらず，また誘えば来るかもしれないという母語話者の期待を生むことになり，有効ではないことが明らかとなった。さらに，このような非母語話者の婉曲的な断りの背景には，日本語のテキスト上に示された日本語母語話者の言語規範があると推測された。しかし今回は，非母語話者への調査のみで，婉曲的な断りのメッセージを受け取った際の，母語話者の意識は調査していないため，今後，当該母語話者への調査を進めることで，本研究で論じた再誘いの問題の全体像をより明確にすることができると考えられる。具体的には，LINE における日本語母語話者の言語規範を把握することができ，日本語のテキスト上に画一的に示された言語規範の再考が可能になると考える。また，問題を生じる誘いとして非常に多く見られたのが，日本語チューターや国際交流支援に関する部署のスタッフからの誘いであった。留学生への支援といった業務に携わっている母語話者であるということを

考えると，いったん断られたとしても可能な限り誘おうとする意識が強い傾向にある母語話者ということも推測される。留学生との接触がそもそも多いために再誘いという問題が多く生じているのか，あるいは，誘う側の属性に関わることなのかという点も，母語話者への調査を進めることで明らかになると考える。

なお，今回の調査では，社会人 J さん以外の協力者は，すべて留学生であった。6.1 で述べたように，協力者の属性，社会的な立場によって，とるべきストラテジーが異なることが示唆されたため，今後は，留学生とは異なる属性の非母語話者による LINE コミュニケーションを個々の状況に照らし合わせて調査し，そこで生じている問題を明らかにしていくことも必要であると考える。

参照文献

Beebe, Leslie M., Tomoko Takahashi & Robin Uliss-Weltz (1990) Pragmatic transfer in ESL refusals. In: Robin C. Scarcella, Elaine S. Andersen & Stephen D. Krashen (eds.) *Developing communicative competence in a second language*, 55–73. New York, NY: Newbury House.

Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press.

藤森弘子（1994）「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー：『断り』行為の場合」『名古屋学院大学日本語・日本語教育論集』1: 1–19.

ICT 総研（2016）『2016 年度 SNS 利用動向に関する調査』http://ictr.co.jp/report/20160816.html（2017 年 7 月 29 日確認）

生駒知子・志村明彦（1993）「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：『断り』という発話行為について」『日本語教育』79: 41–52.

イン，ロバート K.（2011）『ケース・スタディの方法（第 2 版）』近藤公彦（訳），東京：千倉書房.

金鑫（2016）「LINE 接触場面における会話終結部の研究：日本語母語話者と中国人日本語学習者の依頼談話から」『東海大学大学院日本語教育学論集』1(3): 46–68.

小林ミナ（2017）「「状況から出発する」アプローチ」『早稲田日本語教育学』22: 101–113.

小池真理・中川道子・宮崎聡子・平塚真理（2007）『聞く・考える・話す　留学生のための初級にほんご会話』東京：スリーエーネットワーク.

Leadkitlax, Triktima（2014）「タイ・日接触場面における「誘い / 依頼 - 断り」談話における弁明の発話行為の研究」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』11: 81–90.

メリアム，S. B.（2004）『質的調査法入門：教育における調査法とケース・スタディ』堀薫夫・久保真人・成島美弥（訳），京都：ミネルヴァ書房.（Merriam, Sharan B. (1998) *Qualitative research and case study applications in education*. New York: John Wiley & Sons.）

中居順子・近藤扶美・鈴木真理子・小野恵久子・荒巻朋子・森井哲也（2005）『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』東京：スリーエーネットワーク.

西村史子（2007）「断りに用いられる言い訳の日英対照分析」『世界の日本語教育』17: 93–112.

岡田安代・杉本和子（2001）「外国人の断り行動と日本人の評価」『愛知教育大学研究報告　教育科学』50: 53–160.

大倉美和子（2002）「語用論と日本語教育：メキシコ人と日本人の「誘いを断る発話」」国立国語研究所（編）『対照研究と日本語教育』（日本語と外国語との対照研究：10）109–127. 東京：国立国語研究所.

ポンティパー，メッグリアングライ（2013）「携帯メールにおける断りの機能の構成：タイ人日本語学習者と日本語母語話者を比較して」『言語文化と日本語教育』45: 11–19.

ポンティパー，メッグリアングライ（2015）「『LINE』における『勧誘に対する断り』に見られる謝罪：タイ語母語話者と日本語母語話者の比較に着目して」『言語文化と日本語教育』48・49: 110–113.

佐々木泰子（2015）「SNS の利用実態から見た留学生のコミュニケーション・プラットフォーム」『お茶の水女子大学人文科学研究』11: 15–25.

清水崇文（2009）『中間言語語用論概論：第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』東京：スリーエーネットワーク.
清水崇文（2013）『中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話：みがけ！コミュニケーションスキル』東京：スリーエーネットワーク.
総務省（2016）『社会課題解決のための新たな ICT サービス・技術への人々の意識に関する調査研究』http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc242220.html（2017 年 7 月 29 日確認）
武田加奈子（1998）「接触場面の断り行動についてのケース・スタディ」『語文論叢』26: 13–28.
スリーエーネットワーク（編）（2000）『みんなの日本語 初級 I 第 2 版 本冊』東京：スリーエーネットワーク.
簗晶子・大木理恵・小松由佳（2005）『日本語 E メールの書き方』東京：The Japan Times.
吉田さち（2009）「韓国人日本語学習者のメール文における『断り』：日本語母語話者との比較を通じて」『日本語学習者による言語運用とその評価をめぐる調査研究：「日本語能力の評価基準・項目の開発」成果報告書』259–280. 東京：国立国語研究所.
吉田さち（2013）「断りのメール文において韓国人日本語学習者が日本語母語話者と異なる働きかけ方をするのはなぜか：言語管理理論の枠組みを用いた事例研究を通じて」『コミュニケーション文化』8: 44–55.
吉田好美（2010）「勧誘場面の断りに見られる言い訳と不可表現及び勧誘者の言語行動について：日本人女子学生とインドネシア人女子学生の比較」『言語文化と日本語教育』40: 11–20.
由井紀久子・大谷つかさ・荻田朋子・北川幸子（2012）『日本語プロフィシェンシーライティング』東京：凡人社.
王書睿（2015）「「断り」研究の概観と課題：日本語教育の視点から」『日本言語文化研究 城西国際大学大学院紀要』4: 81–95.

Why Does a Non-native Speaker's Refusal of an Invitation from a Native Speaker on LINE Lead to Re-invitation?: Exploring the Problems of Non-native Speakers

NAKAI Yoshio[a] FUNAHASHI Mizuki[b] SOEDA Eriko[c] MUKAI Yuki[d]

[a]Doshisha University / Project Collaborator, NINJAL
[b]Gunma University / Project Collaborator, NINJAL
[c]Fuji Women's University / Project Collaborator, NINJAL
[d]University of Brasília / Project Collaborator, NINJAL

Abstract
This research was conducted to discover the problems non-native Japanese speakers face in the process of writing/typing to communicate with native Japanese speakers, so as to develop situation-based materials for writing/typing skills in the Japanese language. This article focuses on the LINE app, which is the most popular communication tool among people in their twenties and thirties in Japan. Through LINE, we can send one-on-one and group texts, stickers, and emoticons. The communication through LINE is a non-face-to-face communication but similar to synchronous communication because LINE has a "Read" display function, which will notify the sender that the receiver has read their message. We conducted interviews with nine overseas students and one worker to explore the difficulties they have in communicating by LINE. Analysis shows that they have problems with refusing an invitation from native speakers with a higher degree of social distance with whom they need to maintain good relationships, such as a tutor for Japanese language or university staff. The factors of social distance and the necessity of maintaining a relationship with inviters make them avoid straightforward words and use euphemistic and indecisive expressions to refuse an invitation, which then leads the native speakers to re-invite them. Their learned linguistic prescription that it is impolite to refuse directly in Japanese and the strategy of using euphemistic and indecisive expressions troubled non-native speakers who wanted to decline in an amicable manner.

Key words: LINE, refusal to invitation, re-invitation, non-face to face communication, linguistic prescription